〔講演記録〕

第９回赤十字・国際人道法教育フォーラム

紛争地における赤十字国際委員会（ICRC）の人道活動

日時：平成29年４月28日
場所：日本赤十字秋田看護大学、日本赤十字秋田短期大学

眞壁仁美

The 9th Education Forum for the Red Cross and International humanitarian ICRC's humanitarian action in conflict

Hitomi MAKABE

赤十字国際委員会（ICRC）駐日事務所　広報統括官
Head of Communication
International Committee of the Red Cross（ICRC），
Mission in Tokyo

司会：このフォーラムは、赤十字の理念、そして活動などを広く普及させることを目的として開催しています。本年度は赤十字国際委員会（ICRC）駐日事務所の眞壁仁美さまをお迎えして「紛争地における赤十字国際委員会（ICRC）の人道活動」と題して進めていきます。簡単に眞壁さんの略歴をご紹介させていただきます。

新聞記者、報道ディレクター、雑誌編集記者を経て、2009年２月のICRC駐日事務所開設とともに、広報担当官に就任されています。紛争地を主な活動の舞台とするICRCの広報として、世界の人道危機や戦いの現場で働く赤十字の姿を伝えてこられました。2012年、南スーダンではフィールド要員として生計の自立支援事業や家族との連絡回復、再会事業に携わっておられます。2013年、フィリピンのミンダナオ島では、広報要員として甚大な台風被害を受けた被災地の様子をフィリピンの国内外に伝えてこられました。現在は、駐日事務所の広報統括官を務めておられます。それではご登壇をお願いします。

眞壁：こんにちは。今日はよろしくお願いします。皆さんは赤十字国際委員会について、授業などでも一通りどういうことをやっているかを聞いていますか。まず、私たちが一番広報として赤十字で大切にしたいというのは、人間の尊厳です。どういう状況においても、人間が人間として生まれたらみんな等しく苦しみから救われなければいけないということです。

スライド１

皆さんのお手元にもこのオレンジのパンフレット（スライド１）をお配りしていますが、これが「敵味方の区別なく等しく人に手を差し伸べる」という赤十字思想を共有している赤十字運動の３つの構成要素です。過去、ノーベル平和賞を最多となる三度もらっているので、そういったこともこちらのパンフレットに書いてあります。

私は昨日、秋田に来たのですが、一昨日までは長崎でとても大事な会議を実施していました。この世から核兵器をなくそうということで、日本赤十字社のような各国の赤十字社、イスラム圏でいうと赤新月と言いまして三日月なのですが、この赤十字社と赤新月社の代表、幹部の方たちが集まって、核兵器のない世界を作ろうということで、長崎に話し合いの場を設けました。今、国連でも核兵器を禁止しようということで条約の締結に向けて話し合いが行われていて、ICRCも参加しています。人道的にやはりこういった兵器というのは、一度使われてしまったら私たち赤十字ですら人道支援のために被爆地には入れないというところが今の共通の認識になっています。

赤十字のスタッフが核兵器を落とされたところに行って人道支援を行うということは、また被爆者を増やしてしまうので無理です。核兵器というのは本当にこの世に存在してはならないということで、３日間話し合いを行って、長崎宣言を出しました。今後2020年までの4年間、核兵器をなくすということをみんなで声を上げていこうという行動計画も作成しました。詳しくは、駐日事務所のICRCのホームページに日本語で記事がありますので、興味がある方はご覧ください。

ICRCは、赤十字の中でも紛争地で主に活動しています。核兵器以外で、つい最近シリアで化学兵器、生物兵器が使われたという報道があります。そういった兵器を使った戦闘に市民を巻き込んではいけないということで、一般の人たちを保護することと、傷ついた人たちを支援することがICRCの役割となっています。

私たち赤十字、日本赤十字社を含め、赤十字運動の人たちはみんな共有しているのですが、とにかく公平で中立、独立した組織、どの政府にも、どの勢力にも、どの宗教にも属さない中立した組織ということで人道支援を行っています。例えばシリアで、皆さんもISなどをニュースなどで聞いたことがあると思いますが、そうした武装グループが支配しているような地域で、どうしてもその

政府であったり国際支援がたどり着けないところは、赤十字の中立性というところがものすごくものを言います。私たちの強みである中立性を生かして、支配下に置かれている人たちに人道支援を届けるということが赤十字にしかできない支援だということも、国際的に注目されています。

他の国連であったり、今、日本でもとても国際的なNGOが力をつけてきましたが、赤十字が違うところというのは「国際人道法」から役割を与えられているところです。ジュネーブ条約が4つありますが、それに追加議定書が２つ、そこから私たちは役割を与えられています。その条約に加入している政府は現時点で196カ国です。世界で一番多くの国が加入しているのがジュネーブ諸条約と言われています。ちなみに、国連には194カ国が加盟しています。国連の加盟国以上に多くの国が、戦時の決まり事として、ジュネーブ諸条約を軸とした国際人道法を守らなければいけないということを共通認識として持っているのです。そこからICRCは人道支援の役割を与えられているので、紛争下で私たちが活動をするときには、私たちの活動をきちんと守って認めてもらわなければいけないという約束になっています。

スライド２

そもそも、ジュネーブ諸条約を赤十字が草案しているので、実際に戦地のルールが守られているのかどうかというのをモニタリングするのもICRCの役割となっています。なので、私たちは国際人道法の「守護者」であったり、「番人」というふうに言われています。

そして赤十字機関の中では最も歴史が古いです。もう皆さんも十分ご存じだと思いますが、アンリー・デュナンがイタリアで戦争をたまたま目の当たりにして、そういう戦地にきちんと敵味方の区別なく救護する組織が必要だなと言ってできたのが、ICRCです。その後に、平和なときにもやはりこういう組織はあったほうがいいのではないかということでできたのが、日本赤十字社をはじめとした各国の赤十字・赤新月社になっています。その後に、だんだん増えていったので、そこをまとめる機関が必要だということで連盟ができました。

ICRCの構成を少し皆さんに知っていただきたいのですが、2015年時点で、13,500人職員がいます。活動しているのは約80カ国です。その中で日本人は20人前後しかいません。日本赤十字社と一番違うところは、ICRCはジュネーブ諸条約に加入している国から全体の活動資金の90％以上をいただいているという点です。アジアでは唯一日本政府がTOP20のドナー国として入っています。日本の政府はやはりお金だけではなくて、日本人をもっとICRCの中に増やしてほしいということで、外務省を通じて「もっと日本人をリクルートしてくれ」ということを私たち駐日事務所は言われているのですが、もし皆さんも興味があるようでしたら、ぜひ将来の就職先としてICRCを考えていただければと思います。

スライド３

では、実際に現場でICRCが何をしているかというと、大きく分けてこの４つになります（スライド３）。尊厳の保護、人道支援。人道支援というのは、物資を提供する支援であったり、生活を支えるという支援です。あと、人間の尊厳の保護、こちらについては後半で詳しく触れます。そして、予防。私たちが言う予防というのは、紛争が起こらないようにする予防ではなくて、国際人道法を

普及することによって一般の人たちに危害が加えられないようにするという意味の予防です。あとは各国にそれぞれ赤十字社、赤新月社があるのでそこと連携をします。例えば私が南スーダンに行ったときには、南スーダンはだいたい60ぐらいの民族があるのですが、言葉が全く通じないので、その民族の言葉を話せる現地のスタッフが必ずICRCにはいるので、そのスタッフと南スーダン赤十字社のボランティアに一緒に来てもらって通訳も兼ねていろいろと働いてもらいました。情報収集にも欠かせません。やはり中立であることというのは、自分たちが危険を感じることなくいろいろなところに入っていかなければいけないということで、そういうセキュリティーの情報などを入手してくれるのも、各国の赤十字社のスタッフ、ボランティアであったり、ICRCの現地の職員でした。

スライド４

赤十字は2013年、今から４年前に創設150周年を迎えました。１世紀半ですけれども、世界で最も古い国際支援組織となっています。人道ネットワーク、今ボランティアの話を少ししましたけれども、全世界に1,700万人の赤十字・赤新月のボランティアがいるのですが、その人たちから成っているネットワークが、世界最大規模です。なので、皆さんも、もし将来赤十字の看護師になったときには、この人道ネットワークの一員となるので、またそこでいろいろな赤十字としての役割、何か有事があったときに、赤十字にしかできないことを果たす役割が与えられることになります。

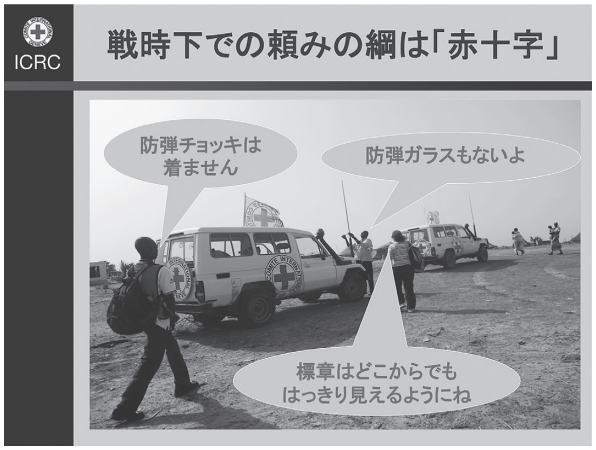
ここで少し国際人道法について、ジュネーブ条約を含めて分かりやすくアニメーションで紹介しているので、皆さんにご覧いただきたいと思います。

〈動画鑑賞〉

https://www.youtube.com/watch?v=x2LivEocnk4

スライド５

戦争が起きたときに国際社会が守らなければいけないこと、赤十字がどういう活動をするかというのを、皆さんにご覧いただきました。



スライド６

実際の紛争であったり、紛争下で活動している赤十字を伝えるということも駐日事務所の大事な役割の一つです。なので、メディアの方に入ってもらって、実際にどういう人道危機に直面しているのかというのを取材していただくのですが、そのときにメディアの方たちに「防弾チョッキは着ないんですか」、「車はきちんと防弾ガラスがされているのですか」ということをよく質問されます。ですが、私たちは防弾チョッキも着ませんし、車に防弾ガラスのような装備も基本的にはしません。その代わり、この赤十字の標章が国際条約で「攻撃してはいけない」ということになっている

ので、私たちはこのマークを信じて活動します。イスラム圏だと赤新月が同じ意味を表します。

なので、ICRCの公用車であるこのトヨタのランドクルーザーには、車のボディー４面すべてにマークを明示し、どこからでもきちんと見えるようにします。もし攻撃をされたときに「見えなかった」または「赤十字の車なんて知らなかった」と言われても、「私たちは明確に掲げていますよね」ときちんと言えるように。例えば森の中に入ったら車のボディーが見えないので、「ここに赤十字がいますよ」ということで旗を高く車に掲げます。赤十字は「レッド」という輸送機を所有しているのですが、地上から見てもきちんと「これは赤十字の飛行機だな」と分かるように、機体のお腹のところにやはり大きく赤十字のマークがあります。攻撃をされても攻撃した側が言い逃れできないように、きちんとマークを明示しています。国際法で守られているので、このマークを付けている赤十字の職員、施設、車両は狙ってはいけないということになっています。なので、私たちの戦時での活動の命の綱、頼み綱は赤十字・赤新月のマークなのです。

スライド７

最近の紛争の傾向ですが、今なかなか国連をはじめとして国際社会が紛争を解決できなくなっています。シリアであったり、イエメンであったり、そういったいわゆる紛争が行われているところでアメリカ、ロシア、アラブの国など多国籍軍が参加していますが、戦闘は激化する一方で、全然解決、出口というのが見えません。戦争が終わらないのです。１回始まってしまったら終わらないというところが大きな傾向の一つとしてあります。

どうして終わらないかというと、とにかく武装グループというのが日々どんどん枝分かれしていき、誰と話し合っていいのかが分からないというのがまずあります。昔は、国対国のいわゆる‘戦争’だったので、その国の最高司令官だったり大統領、首相と話せばよかったのですが、今は一国内の中でいろいろな武装勢力が国を相手に戦っていたり、武装勢力同士で戦っていたりということですごく複雑化しています。武装勢力の中でも「このボスにはなかなか同意できないな」というと新しいグループを作って、また違うグループになってしまったりということもあるので、とにかく細分化されすぎてしまっています。一つの勢力が武器を捨てたとしても、また新しい勢力と話し合って武器を捨てるように説得しなければいけないということで、なかなか戦争が終わらないという要素の一つになっています。

後で説明しますけれども、そういった「武器を捨ててください」や、「紛争をやめてください」、「戦闘行為をやめてください」というのは、赤十字は一切言いません。それを言うのは国連であったり、多国籍間での話し合いによって政治的解決に導かれます。私たち赤十字はあくまでも人道的な支援をするということで、政治解決には一切口を出しません。

戦闘の地域化ですが、皆さんもニュースでたまに耳にされるかと思いますけれども、シリア国内であったり、イラクであったり、イエメンで戦争が行われていても、そこから非常に大量の避難民が生まれていて、限定された１カ所で戦争が行われているという問題ではもうなくなってきているのです。日本はまだアジアでそんなに大きな紛争がないので、身近に感じないかもしれませんが、やはりヨーロッパの人たちは、日々この難民問題に頭を抱えています。

あと、戦力の圧倒的な差があります。政府は例えば空爆ができる戦闘機を持っているので、空から武装勢力の人たちを攻撃することができるのですが、小さな武装勢力はそういう戦力を持たないので、どうしてもテロであったり、また一般市民を脅かすというような手段に出がちです。それも昨今の紛争の傾向の一つになっています。

あとは、とにかく医療スタッフが狙われるケースが後を絶ちません。先程のVTRの中にもあったように、医療スタッフというのは絶対に守らなければいけないのです。よく私たちも国境なき医師団と一緒にセミナーや、メディアに対するイベ

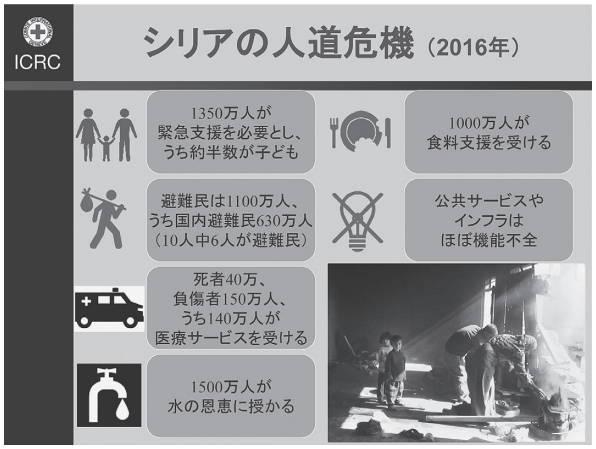
ントをして、紛争地で医療サービスが危機にひんしているというメッセージを発するのですが、国連でも、医療従事者を守ろう、医療サービスをきちんと紛争下で行えるようにしようという決議がなされたにもかかわらず、いまだに医療スタッフが戦時下で狙われています。それは、国際人道法の重大な違反行為になっています。

今話したようなことも、結局解決できる有効な手段というのを、いまだに国際社会は見いだせていません。では、誰が一番犠牲になるかというと、やはり平和を待ち望んでいる紛争下に暮らす人たちです。そういう人たちに赤十字は寄り添い、政治とは距離を置きながら、日々、本当に24時間態勢でシリアなどの国で現地の赤十字社・赤新月社と一緒に人道支援を行っています。

スライド８

間もなく2016年の年次報告が出るのですが、まだ最新のデータが出ていないので、2015年のデータを使用します。重点的にICRCが活動を行った地域というのを10カ国挙げてみました。これは、どれだけ人道支援にお金を割いたかということで順位をつけています。ウクライナとアフガニスタン、ソマリア、中央アフリカ、南スーダン、コンゴ民主共和国、マリ、イラク、シリア、イスラエルおよび占領地区です。占領地区というのはパレスチナ自治区になります。こうやって見ていただいても、本当にアフリカと中東に集中しています。そこから大変な数の避難民が出ていて、赤十字もそうした人たちへの支援に非常に力を入れています。

私たちは今シリアで一番大きな活動を行っているのですが、今のシリアはどういう現状かというのを、数字と一緒に皆さんと見ていきたいと思います。



スライド９

緊急支援を必要としている人が1,350万人です。その内、約半数が子どもたちです。この1,350万人というのは東京都の人口（約1,370万人）と同等です。ということは、東京の住民がみんな国際社会の支援がないと明日の命も脅かされるというような状況になっています。

シリアの避難民は、1,100万人です。うち、国内避難民が630万人です。避難民と国内避難民がどう違うかというと、避難民は、強制的に家を追われた人たちを指し、この中には国境をまたいだいわゆる「難民」も含まれます。自国内で逃げ惑っている人たちというのが国内避難民です。難民も大きな問題ですが、私たち赤十字は、とにかく国内避難民をまず優先して助けようではないかということになっています。国内避難民が国内で逃げ場を見つけられず国境を越えて難民問題に発展するので、まず国内避難民の数を減らせば難民の数も減るということで、国内避難民の支援に重点を置くということです。避難民1,100万人というのは難民と国内避難民を足した数で、10人中6人が国内避難民となっています。シリアではもう戦いが始まって6年以上たったのですが、これまでに死者が40万人、負傷者が150万人です。その内、赤十字と赤新月の医療サービスを受けたのが140万人となっています。

やはり紛争が起こると何が一番困るかというと、社会のインフラが空爆などで壊されてしまうことです。水が飲めなくなり、道路が封鎖されてしまう、というのが命をつなぐ大きな障害になっ

ているので、まず私たちが一番先に提供するのが、飲める水、きれいな水です。シリアでは、1,500万人がこれまで水の恩恵に授かっています。そして1,000万人が食料支援を受けてきました。これは2016年の数字です。そして公共サービスやインフラはほぼ機能不全ということで、とても住めるような状況にはありません。

スライド10

ここまではシリアのお話をしましたが、その前に話したように他の国でもいろいろな紛争があります。全然解決されていないので、もうこんな国には住めないと言ってやはり自分たちの国を逃げ出す人、この村は貧しすぎると言って自分たちの村を逃げ出す人、高まる暴力に強制的に家を追われる人というのがたくさんいて、今ではもう6,500万人を超えてしまいました。そのうち、国内で逃げ惑っている人たちが３分の２です。アフガニスタン、イラク、ナイジェリア、南スーダンなどでそういった国内避難民の数がいまだに増え続けています。

スライド11

こちらは、国を出たシリアの人たちに赤十字がどういう支援をしているかというスライドです。まず海を渡ってヨーロッパにたどり着こうとするので、船が岸に到着します。陸続きの国々には赤十字社、赤新月社があるので、各社ときちんと連携します。まず着いたときにこの人たちの健康状態はどうかということを調べます。生きてたどり着いた人もいれば、残念ながら命を落としてしまった方もいるので、遺体の管理や身元確認ということも赤十字はしています。あとは、家族と離れ離れになっている人たちもいるので、家族の情報を聞き出して再会に導けるような支援も行っています。また、戦地から逃げ出してきたことに加えて、長い船旅を経てたどり着いているので、精神的な心のケアというのもやっています。

先程、日本政府はICRCのトップドナーのひとつというお話をしましたが、現場は実際どうなっているのかを含めて、世界の最新の人道状況を直接政府に伝えるため、スイスのジュネーブにあるICRC本部から、総裁など組織の幹部が来日します。つい先日も副総裁が、核兵器廃絶に向けた赤十字会議に出席するために日本に来ていました。

以前、来日した幹部の一人がメディアでのインタビューで言っていたことですが、私自身「あ、今現場はこうなっているんだ」と思って驚いたことがあります。かつて戦争時、紛争時の緊急人道支援というのは、先ほど言ったようにまず水を届けること、食料を届けること、あとシェルターをきちんと与えることという衣食住に関してだったのですが、今の緊急支援は何かというとWi-Fiの提供であったり、携帯電話の充電なのだそうです。やはり自分の国を逃げ出してきた人が家族と連絡を取りたいであったり、自分の無事を伝えたいという気持ちから「電話を充電したい」と言うのが一番のリクエストということで、無料Wi-Fiであったり、チャージができるテントのようなものを立ち上げて、たどり着いた人たちが電話やインターネットで家族や知り合いと連絡が取れるようにすることが、緊急支援のひとつになっているのです。これも最近の紛争の人道支援の傾向です。

あとは、今、避難民の中にも、例えば治安を脅やかすいわゆるテロリストと言われる方たちも入っているかもしれないということで、着いたときにそういう要素がある人というのを、その国で

あったり、いろいろな当局の人たちが拘束をして収容所に入れることがあります。先ほどのVTRにも出てきたように、赤十字の独特な活動なのですが、収容所を訪問して、拘束された人たちが虐待や拷問を受けずにきちんと人間として扱われているのかといったことをモニタリングしています。収容されているということは何かの容疑があるということなので、きちんと法的な手続きを踏んで、罪があるとしたら追及するなど、司法手続きをきちんと進めるように、赤十字が当局と話をしたりします。なので、避難民に対しても同じくそういった訪問を行っています。

あと、子どもの支援です。将来・未来がある子どもたちが避難民となったことで、教育が止まってしまうことが懸念されます。自分たちがたどり着いた国の言葉が話せないことが多く、そういう子どもたちの教育が止まってしまうことが次の世代に負の財産を残すということで、子どもたちの支援を現地の教育当局と話し合いながらやっています。

そして、無料通話の提供や携帯電話・衛星電話の貸し出しも行っています。あとは家族と再会させるために個人情報を登録します。赤十字にはファミリー・リンクという事業がありまして、ウェブサイト上で名前を登録して、家族を再会に導くということをシステム的にやっています。このように、大陸をまたいで隣の国と連携を取りながら、赤十字の人道ネットワークを生かして活動しています。

スライド12

ここで、私が実際に赴任した南スーダンのお話をします。南スーダンに行ったのはちょうどスーダンから独立をして半年後（2012年２月）でした。自衛隊が平和維持活動に参加するということで、私もそのタイミングで現場に行きたいということをジュネーブ本部に言って、自衛隊が本格的に活動を始める少し前に入りました。独立前は、スーダンという大きな国の中でイスラム教徒中心の北部と、キリスト教など非イスラム教徒が多かった南部の対立から内戦が行われていました。結局南部が独立して南スーダンという国ができたのですが、私が赴任した当時、スーダンにいた南部出身者が、新しい国となった自分たちの出身地に大量に戻り始めて来ていたのです。そうした帰還者がきちんと生活を再開できるように、自立支援をしていました。あとは、離散家族の再会支援です。長い間内戦状態だったスーダンから逃れるために、例えば隣国のケニアだったり、ウガンダだったり、家族が散らばっていたので、そういう人たちの再会支援をしていました。

私が南スーダンに行ってまず現地の人たちに聞きたかったのは、赤十字のイメージです。多分、日本で「赤十字と聞くとどういう団体だと思いますか」と聞くと、病院であったり、献血であったり、災害救援という言葉が出てくると思うのですが、南スーダンは違っていました。私はすごく驚いたのですが、南スーダンで「赤十字とはどういう団体という印象がありますか」と聞いたら「家族と再会させてくれる組織」と言ったのです。赤十字はその国特有の人道問題に手を差し伸べるので、一番身近だったのが、南スーダンの場合は家族をつなぐ、再会させるという活動だったのでしょう。

ICRCの面白いところは、かつてICRCが支援した人を職員として雇うことが多々あるということです。ちょうど私が南スーダンにいたときに財務担当だった現地の同僚が、自分がなぜICRCに入ったのかについて話してくれました。彼は８歳のときにスーダン内戦があってお母さんと別れてしまいました。そこで、赤十字が、隣国のウガンダにいるお母さんを探し出しました。通常、１対１で会わせるというのではなく、ある程度の数が集まったら、そこで飛行機を飛ばして複数の家族と

複数の子どもたちを１カ所で会わせるというオペレーションを行うのですが、そのときに子どもたちがいっぱい集まって、スーダン側からウガンダにいる家族たちと会うことになりました。もともとアフリカ人はものすごく視力が良いので、遠く離れていても自分のお母さんが誰だというのは子どもには分かるのです。その財務担当はそのときに23歳になっていて、８歳で別れてからもう15年がたっていました。多分お母さんは自分に気付かないだろうと彼は思っていたのです。自分は母親の顔を覚えていたので、すごく遠いけれどもすぐに見つけることができました。自分の母親を見つけて笑った彼の歯を見て、なんと「あの歯は自分の息子だ」と息子に向かってお母さんも走り出したのだそうです。その出来事が忘れられず、「何かの形で赤十字に恩返しをしたくて、赤十字の職員になった」と語ってくれました。もうこの話を聞いた職員たちはみんな泣いていました。そういう赤十字にしかできないこと、私たちが持っているネットワークがあるからこそ与えられる希望であったり、安らぎというものがあるというのを本当に実感した瞬間でした。

３つ目の戦傷者のケアについてですが、独立した後も、スーダンとの間で戦闘が散発していたので、傷ついた兵士や民間人のケアをしていました。戦闘行為だけではなくて、たくさん地雷が埋まっていたり、不発弾などもたくさんありました。これは私が北部のマラカルにある病院を訪ねたときの写真なのですが、この男の子は手榴弾が落ちていたのをおもちゃだと思って拾って投げて遊んでいたのだそうです。そうしたらそれが手榴弾で、投げているうちに爆発してしまい、左手の指が２本飛んでしまったのです。それで縫合するためにこの病院に来ていました。ちょうど私は折り紙を持っていたので、折り紙で作った風船で遊んでいる写真です。こういう何の罪もない子どもも、紛争の負の遺産で負傷してしまうという例がいまだに後を絶ちません。

家畜へのワクチン接種ですが、アフリカはウシがお金と同じくらいの価値なので、とにかく自分たちの財産を減らしたくないということで、ウシだったり、ヤギだったり、家畜へのワクチン接種というのを当時は行っていました。今も行っていますが、結構当時はそれが大きな活動の一つでした。

そして、国際人道法の普及です。「こういう大量破壊兵器を使ってはいけません」「住民を巻き込むような無差別兵器を使ってはいけません」「家に入って女性をレイプしてはいけません」「家を焼き討ちしてはいけません」という話をします。戦時の混乱に紛れてそういう非人道的な行為は行ってはいけませんと、実際に武器を持っている人たちに会って直接説きます。

そこから2017年現在へと至るのですが、2013年の12月、私が南スーダンに行った翌年に内戦が始まってしまいました。独立したときに、ICRCの現地のスタッフが言っていたことが現実になってしまったなと思いました。その同僚は私にこう言っていました。「独立したばかりで、まだスーダンと南スーダンで石油の利権などをめぐっていざこざがあるから国が一つにまとまっている。やっと自分たちの国が持てたということで希望があるように見える。でも、一旦スーダンとの事態が落ち着いたら、南スーダンは内戦になるだろう」と。南スーダンには60もの民族がいて、それぞれがみんな仲がよいわけではないのです。今の南スーダンの政権も民族同士のバランスがうまくいかなくて内戦の要素が生まれているので、やはりそのとき同僚が言っていた状況になってしまったなと思って、この2013年12月の紛争勃発は本当に悲しかったです。やっと自分たちの国が作れたのにまた戦争に逆戻りしてしまうことで、住民にとっては絶望しか与えません。

やっと帰ってきた人たちも再び避難民になるという状況が生まれています。治安が悪化していて、女性に対するレイプも横行しています。あと、子どもも兵士にリクルートされてしまい、武器を持たされて戦場に出されるという状況が続いています。性暴力も子どもに武器を持たせることも国際人道法では禁止されていますし、南スーダンも国家となってからジュネーブ諸条約に加入しています。人道状況の改善をICRCも政府の人たちと話をしていますし、反政府勢力の人たちとも定期的に対話の機会を持っています。

スライド13

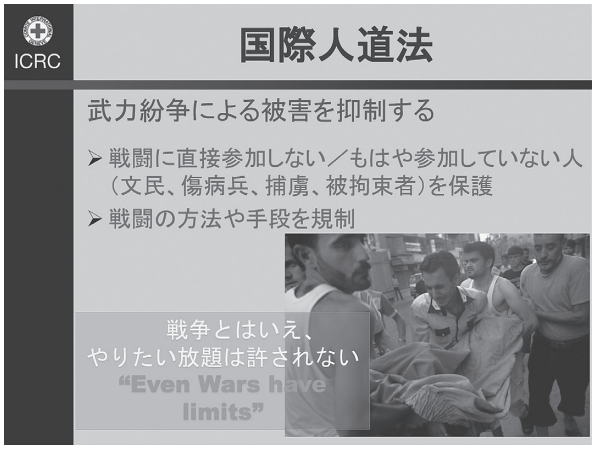
先ほどお話ししたとおり政治的な解決がなかなか望めないので、2015年10月、ICRCは初めて国連と共同で国際社会に向けてジュネーブから警告を発しました。国連はやはり政治的解決を目指す機関なので、各国の政府は自分たちが加入している人道法上の義務を果たして持続可能な紛争解決策をみつけよう、話し合いを進めようと呼びかけました。一方で、その人道法から役割を与えられている赤十字が訴えたのは、国際社会は市民やインフラへの意図的な攻撃を非難して、人道法の遵守を促し、強化しようということでした。

皆さん漠然と、国連と赤十字は違うということは分かっていると思いますが、どう違うか具体的に分かりますという人は手を挙げてもらえますか。（挙手なし）そうですよね。赤十字もこうやって紛争地で国際的な活動をしていると、政治的なところに発言をするのではないかと思われるのですが、先ほどから言っているように、政治というところには一切関知しないのです。

分かりやすく言うと、例えば、お父さんとお母さんが殴り合いのけんかをしています。それでお父さんがお母さんを殴ったら、お母さんが額から血を出してしまいました。そして、けんかをしている横で、生まれたばかりの子どもがずっと泣いています。お腹を空かせて、おむつをぬらして泣いています。このときに、国連と赤十字はどういうふうに対応するかというと、「もうけんかをしないでください。あなたたちは何が原因でけんかをしているのですか。もう仲直りをしなくては駄目です」と言うのが国連の役割です。そして赤十字は、泣いている子どものおしめを替えて、ご飯を与えて、この夫婦のけんかで被っている被害をまず埋めてあげるということをします。あとは、もちろんお母さんが血を出しているので手当をします。どちらかが欠けてもやはり駄目で、手当をしたり、子どもの世話をする人たちばかりがいても、この夫婦はずっとけんかをしたままになってしまいます。逆に、けんかを止めようとするだけでは、子どもはこの夫婦がけんかをしている間はお腹を空かせたままですし、奥さんも、そこまでいかないとは思いますけれども、血を流して失血状態になってしまうということがあります。政治的な問題の解決、けんかを止めるという役割の国連と、そこから生じている被害、争っている当事者ではなくて子どもであったり、紛争時でいうと民間人ですね、戦争には全く関与していない民間人の人間性を保つ、人間の尊厳を保つということをやっているのが赤十字です。

スライド14

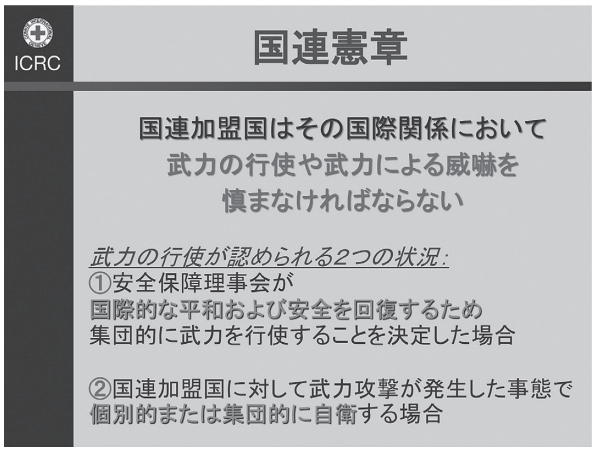
その役割の基となっているのが、赤十字の場合は国際人道法です。国連の場合は、国連憲章というものがあります。先ほどのVTRのおさらいになってしまいますが、とにかく人道法というのは、武力紛争による被害を抑制する。戦争に参加していない人たちを保護するということです。



スライド15

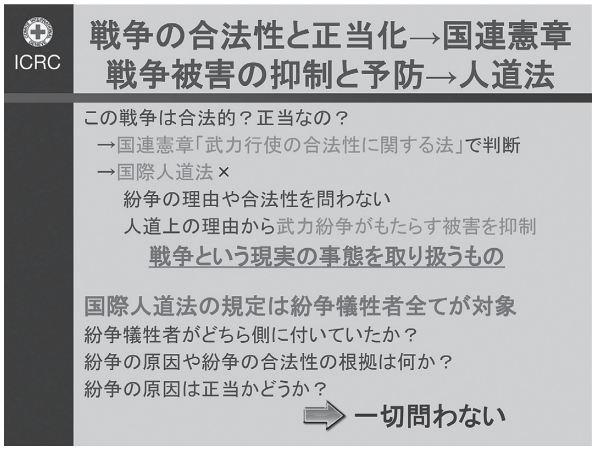
先ほど子どもとお母さんの話をしましたけれども、そこで実際にけんかをしているお母さんは当事者なのですが、けがをした時点で私たちが支援をする対象となるのです。戦闘を行っている兵士、戦闘員には赤十字は一切保護もしなければ支援もしません。ただ、一旦病気になったり、傷ついたり、あとは収容所に入れられてしまった場合、この人は今武器が持てない状況だよねということを確かめたら、そこで初めてその人の人間性を保つために赤十字は支援を行います。

一昨日まで長崎で廃絶に向けて話し合われていた核兵器もそうですが、民間人や環境、食物連鎖など地球上の営みに多大なる被害を与えるような兵器は使わないように訴えるのも赤十字の大切な仕事です。戦闘の方法や手段を規制するということで、この『Even wars have limits』というのが私たちのキャッチフレーズになっていますが、「戦争とはいえ、やりたい放題は許されない」戦争でもきちんと制限があるのです、ということを言い続けています。



スライド16

一方、赤十字が踏み込まないことを国連憲章がうたっています。まず、国連加盟国は基本的には戦争はしてはいけないと言っています。武力行使や武力による威嚇を慎まなければいけないと言っています。ただ、この以下の2つの状況が例外となります。武力の行使、戦争の行為が認められる2つの状況です。一つは、国際的な平和が脅かされたときです。安全を回復するためです。もう一つは、国連加盟国に対して武力攻撃が発生した事態で、個別的、集団的に自衛する、自分たちの国を守るために戦うという、この２つが戦争が正当化される理由になります。



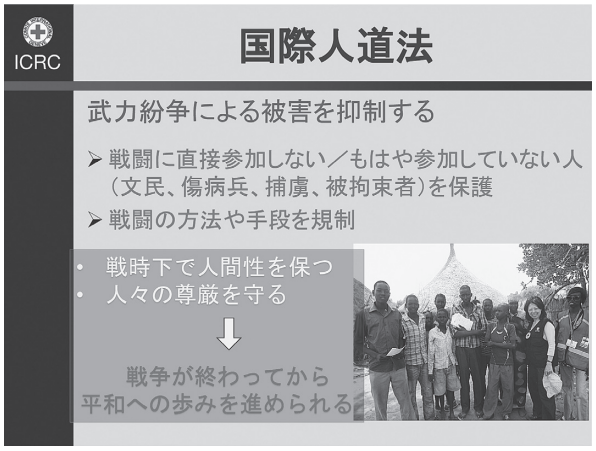
スライド17

ということで、この戦争は正しいのか、間違っているのか、正当化できるのかというところを論じるのが国連です。この戦争は駄目だよとか、この戦争だったら自分たちも多国籍軍として参加しようではないかなど、そういうことを決めるのが国連です。一方で赤十字は、あくまでもそうした戦争の被害を受けている人たちに、これ以上の被害が及ばないように予防をしたり、支援をしたりしています。

国際人道法、赤十字というのは、現実に起こってしまった戦争という事態を取り扱っていますが、別に私たちは戦争を奨励しているわけでもなければ、いくら紛争予防というところに首を突っ込まないからといって戦争していいと言っているわけではありません。この人類の歴史の中で戦争がなくなったことがかつてないので、それならばその状況下で苦しんでいる人たちを救うきちんとした枠組みを保証しようということでできたのが人道法です。なので、紛争当事者、犠牲者がどちらの側についていたかであったり、この戦争はそもそも正しいのかということは、一切赤十字は問うことなく、ただ純粋に困っている人に対して人道支援を届けるということに特化しています。

スライド18

政治的な話はしませんが、人道外交という名のもと私たちはいろいろな立場の人たちと対話します。これはシリアのアサド大統領とICRC総裁のマウラーが２人で話している写真です。左下は、南スーダンの同僚が実際に武器を持っている南スーダンの国軍にセミナーを行っているところです。この横の写真は、戦いから逃れるため避難していた人たちです。南スーダンは村単位で結集力が強いので、村の長に「ここにいる村民はどのくらいいて、今どういうニーズがありますか。どういう支援が必要ですか」ということを直接聞いています。このように、私たちが話すのは、紛争解決や平和構築ということではなく、戦いに民間人を巻き込まないこと、そして助けが必要な人たちの下に安全に駆け付け支援を届けることに終始しています。



スライド19

国際人道法が言わんとしていることは、戦時に人間性を保ち、人々の尊厳を守ることで、戦争が終わったときに平和への歩みを進められるということです。例えば、敵からものすごくトラウマを植え付けられたら、やはりその敵を許すことはなかなかできません。戦闘が終わって平和になったとしても、心や体の傷はずっと残り続けます。なので、そういう傷が残らないように、戦争に関係のない民間人には絶対にそういう危害を加えてはならない、次世代に禍根を残さないという点で、やはり人道法は有効だと赤十字は信じ続けています。

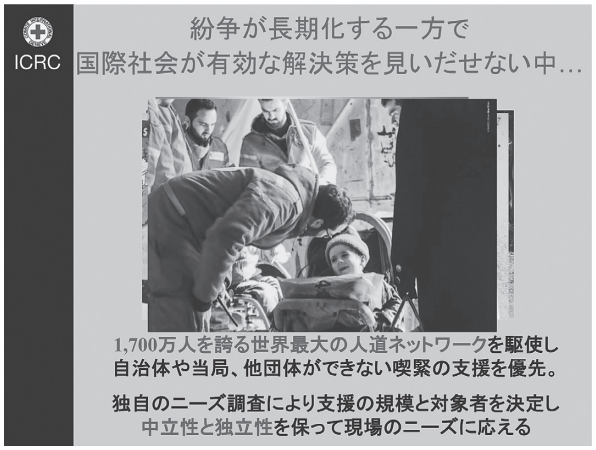
人間の尊厳を守ると言いましたが、では実際にどういうことかというのを、皆さんにVTRを見て感じていただきたいと思います。私たちはアフガニスタンで地雷や紛争によって手足を失った方たちに、無料で義肢義足であったり、リハビリ、あと職業訓練を提供する一方で、生活の自立や社会復帰の支援ということもやっています。その人たちが車いすのバスケットボールのナショナルチームを作って、前回のリオのオリンピックの予選で日本に来たときの映像です。ご覧ください。

〈動画鑑賞〉
https://www.youtube.com/watch?v=NFw_Z8CZCP4

スライド20

先ほど紹介がありましたように、私は元ディレクターだったのでICRCに来るまではこういうドキュメンタリーを作ったりしていたのですが、このロケにも立ち会って編集もしました。彼らたちが何よりも喜んで言っていたのは、外に出ても爆弾が落ちてくる、地雷が埋まっているという恐怖を全く持たなくていいということと、そんな日本がどれだけ素晴らしいか、ということでした。不安や恐怖心を一切持たずに日常を送ることができるということが、やはり本当の人間の尊厳を保つ

うえで大切です。あとは、義肢や義足を提供されて一応動けるようにはなっても、仕事がなかったり、スポーツができなかったり、身体的な機能はなんとかサポートして取り戻せたとしても、足を失う前にやっていた仕事であったり、こういったスポーツに参加するというチャンスがこれまであまりなかったのです。しかし、人間に生まれてきたからには、同じようにみんなが人生を楽しめる、謳歌できるというところまで持っていく。それを最後まで見届けることが赤十字の大事な役割なのです。なので、私たちは人間の尊厳を守るということ、そしてそこを確立するということを最終のゴールにしています。あとは、戦争が終わったときに、心の傷であったり、体の傷が残らないように、戦争が行われている最中も一般の方たちにこういう苦難を与えてはいけないと武器を持っている人たちに訴え続けるという、大切な使命も背負っています。



スライド21

戦争が長期化する一方で、国際社会が有効な解決策を見いだせない中、赤十字ができることというのは、1,700万人を誇る世界最大の人道ネットワークを駆使して、自治体や当局、他の団体ができない緊急の支援を提供すること、それを優先することです。あと、私たちは国連であったり、NGOのデータは参考にはしますが、実際に自分たちが現地に足を運んでそれぞれ面談をして、どういうニーズがあるのかというのを、赤十字の枠組みの中できちんと調査をします。そういう独自のニーズ調査によって支援の規模と対象を自分たちで決めて、中立性と独立性をもって現場のニーズに答えるのが、赤十字に課せられた役割になっています。

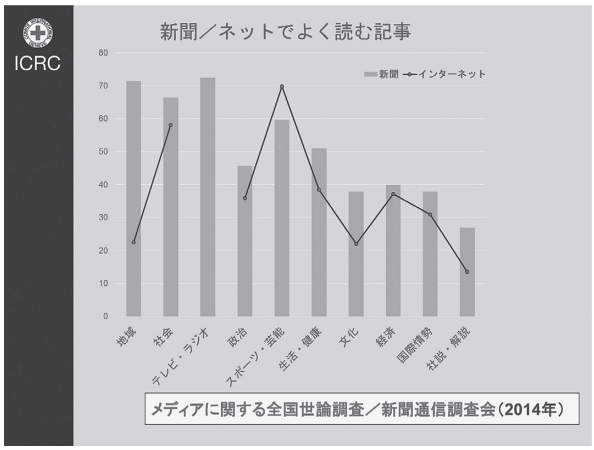
スライド22

では、一般の人たちが戦争によって不必要な苦しみを与えられないようにするにはどうしたらいいのか。私たちは、ジュネーブ本部も含めて常にいろいろと話し合っています。まずは、その対策、準備、もしかしたら紛争に発展するかもしれないという状況を日頃から観察・分析するチームがいるので、そういう同僚と意見を交わしながら事態に備えます。紛争に発展する場合は、どういうチームを構成して、どのくらいの規模で派遣するのかという事前調整をしたり、例えば、日本政府と関係の良い国が紛争を行うとしたら、日本政府がその紛争による民間人の被害を止められるような助言ができるのではないかなど、そういった周囲の支援などもいろいろと呼び込んだりします。

今、紛争や戦争以外にテロが起きたり、実際に戦場でロボットが兵士となって戦う時代が来るかもしれないと言われています。あとインターネットがこれだけ普及していると、サイバー型テロであったり、サイバー戦争というのも最近いろいろと懸念されるようになりました。そういう事態にきちんと対応できる法律が必要なのかもしれないという話し合いもICRCはしています。ただ、今ある法律の中でできることはやはりきちんと守ってもらって、それを促していこうよという基本姿勢は変わりません。

あとは皆さんにも今世界がどういう状況にあるのかということを知ってもらうために、メディアを通じて現状を伝えたり、こういうセミナーや講義の機会を設けています。シンポジウムなどいろいろなイベントを通して、戦争に関係のない人たちにも現地の声を聞いてもらい、その人たちの日常に少し思いをはせてもらう機会をなるべく設けて、世論を動かしていければと思います。

この間、やはりこういった場で横浜の高校生と意見交換する機会があったのですが、国際高校の生徒だったこともあり、積極的に自分たちでできることというのを模索してくれていました。その中で私もすごいなと思ったのが、自分たちは高校生なので、親からお小遣いをもらっている立場だからなかなか募金などで赤十字に貢献できない。けれども、ツイッターであったり、フェイスブックであったり、自分たちが知った知識を広げるということはできるというんです。そこで生み出した言葉が『シルシエン』。もちろん日本語で「知る支援」なのですが、片仮名で『シルシエン』にして、学生ができること、生徒ができることを世界に伝えていきたい、世界の共通語にしたいと言ってくれたのです。皆さんが起こした行動がすぐに結果につながらなくても、だんだんとこの輪が広がっていき、現状を変える力になるかもしれないのです。なので、まずは皆さんに世界の現状を知ってもらい、現場の人たちやそこで行われている人道支援に思いを寄せてもらい、少しでもいいので、自分が知ったことや心を動かされたことをSNSのネットワークを使って広げてもらえたらと思います。皆さんが今すぐできることとして、そういうことも可能なのかなと思います。

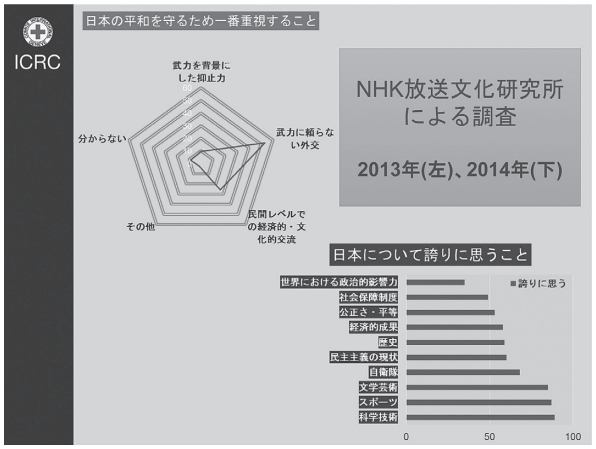


スライド23

元々メディアの出身なので、今私が記者やディレクターなどかつての同僚とよく話をするのが、日本の国際情勢への関心の低さです。一般の人たちがあまり国際情勢に関心を持っていないので、メディアもやはり視聴率であったり、どれだけ読まれているかというのが気になるので、どうしても受け身になってしまい、国民の関心の低いものはあまり取り上げないというところがあります。2014年に日本で行われた「メディアに関する全国世論調査」を見てみましょう。折れ線グラフがインターネットで、棒グラフが新聞なのですが、よく読まれる記事は、新聞ではダントツにテレビ・ラジオ欄です。そして、インターネットだとスポーツや芸能ニュースが関心が高く、社説・論説はあまり読まれないということがこのグラフを見ると分かります。国際情勢への関心を見てみると、やはり両方とも低く、新聞に関しては後ろから2番目というぐらい、世界で何が起こっているかということにあまり日本人が関心を持っていないという結果が出ています。

スライド24

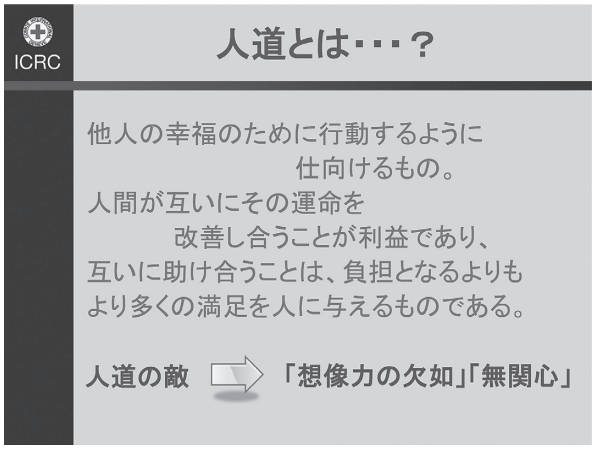
ただ、その一方で、世界に目を向けてみると、世界は日本を「影響を与える国」として5番目に位置付けているのです。日本人は世界に関心を持っていないけれども、世界の国々の人たちは、日本はすごく影響力を持っていると思っているというのがこの調査で分かります。



スライド25

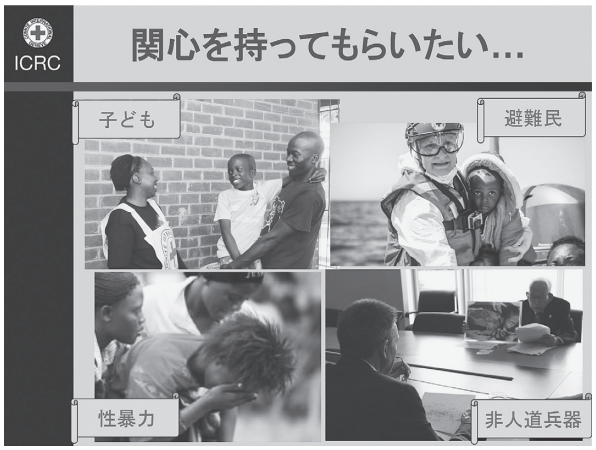
こちらはＮＨＫの放送文化研究所による調査なのですが、日本人が日本の平和を守るために一番重視することは何かというと、「武力に頼らない外交」となっています。自分たちが平和を維持するには、外交上の対話を通じて実践してほしいというのが日本国民の圧倒的な意見です。「武力を背景にした抑止力」というのは、全く低いのです。あと、民間レベルでの交流も外交に比べたら低めです。

では、そうやって武力に頼らない外交、すなわち政治力を頼りにしている一方で、「日本について誇りに思うこと」という調査では、「世界における政治的影響力」が一番低いのです。一番国民が誇りに思っていることは、科学技術の力で、スポーツ、文学、芸術と続くのですが、政治に対して「平和を維持するために、私たちはあなたたちを信頼します。あなたたちに平和を守ってほしい」と言っている一方で、外交に必要な政治的影響力を誇りに思わないという、ここにすごく矛盾が生じているのです。まだ政治参加と言ってもなかなか難しいと思いますが、ここを皆さんがもう少し意識を変えて、積極的に政治に対して意見を言って、少し外に意識を向けて、世界が思っている日本の役割というところもこれから考えてもらえればと思います。



スライド26

これが最後のまとめになりますけれども、これは赤十字関連の本に書いてあったものをそのままここに持ってきたのですが、「人道」とはすごく漠然としていて、どういうものなのだろうと思ったときに、ちょうどこの資料が出てきたので紹介します。『人道とは、他人の幸福のために行動するように仕向けるもの。人間が互いにその運命を改善し合うことが利益であり、互いに助け合うことは、負担となるよりもより多くの満足を人に与えるものである』。そして行きつくところは、『人道の敵は武器を持って戦う人たちではなくて、想像力の欠如であったり無関心だ』となります。私たちが関心を持つことで、政治も変えられるし、世論も動くと思うので、そこも一人一人がそういう力を持っているのだということを皆さんにも考えてもらえればと思います。



スライド27

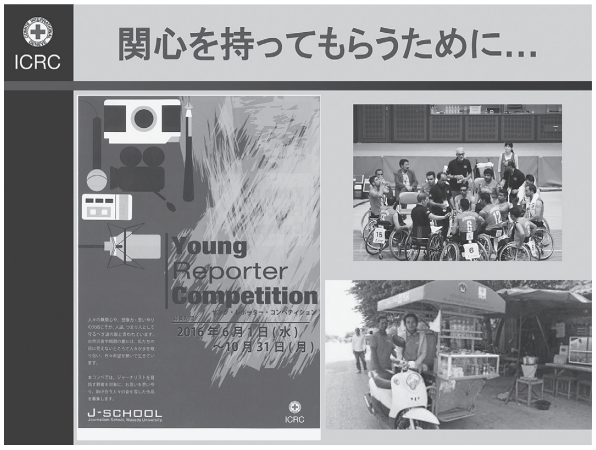
そこで、私たちICRCが関心を持ってもらいたいことというのが、今４つあります。「子どものケア」、例で子ども兵士の話もしましたけれども、子どもがやはり弱者として国際的な支援を必要としています。あと「性暴力」、核兵器をはじめとした「非人道兵器の廃絶」、そして「避難民」です。この４つについてICRCとして世論を動かしたいと思っています。

スライド28

日本で関心を持ってもらうためにやっているこ

とですが、ありがたいことに日本は紛争国ではないので、なかなか紛争の話や戦争の話をしても身近に感じてもらえないという、広報としてのチャレンジがあります。なので、エンターテインメントの要素を少し加えようと、まずは、漫画を学研さんから出しました。私自身もやはり小学生や中学生だったときに、歴史や偉人伝などは漫画の力を借りて学んだ部分がすごくあるので、こういう紛争や戦争など重い話を漫画で皆さんに身近に感じてもらえればなということで、子ども兵士を主役にした漫画を発行しました。

あと、毎年６月に開催される、俳優の別所哲也さんが1999年に立ち上げたショートショートフィルムフェスティバル＆アジアというのがあります。この国際映画祭の中に２年前の戦後70年を機に「戦争と生きる力」プログラムというのをICRCが立ち上げました。今年も６月から短編映画12本を２つのプログラムに分けて、６本ずつ東京と横浜で上映します。６月の１日から25日までが上映期間なのですが、ドキュメンタリーなどずっしり重いメッセージを伝える作品もあれば、コメディーだったりアニメーションだったり、結構バラエティに富んだラインナップとなっています。やはり紛争地にいる人も私たちと一緒で、ご飯を食べれば家族や友たちとの団欒があったり、恋もします。そういう日常が映画の中でも描かれているので、秋田では遠いかもしれないですけれども、６月に東京に来る機会がありましたらぜひご覧ください。いずれ東北でも上映したいなと思っています。２年目だった去年は、初めて大阪で上映しました。



スライド29

やはりメディアの力というのも世論を動かす意味で絶大なので、去年、ヤング・リポーター・コンペティションというものを立ち上げました。皆さんと同い年の人たちに「人道」や「思いやり」をテーマに映像か記事か写真のルポルタージュを提出してもらいコンペティションを行っています。また今年もやりますので、皆さんも関心を持ってもらえればと思います。あと、パラリンピックが2020年にあるので、先ほど紹介した障害者スポーツといったものも積極的にメディアを通じて発信していきたいと思っています。

スライド30

動画でご覧いただいた「戦時の決まりごと」を含めて、国際人道法などの難しいテーマをアニメーションで分かりやすく伝えるように最近力を入れています。「ICRC、資料」と検索ボックスに入れてもらえればすぐに出てきますので、関心がある方はどうぞご覧ください。

この後、質問を受け付けますが、これで一応終わらせていただきます。長い間、ご清聴ありがとうございました。

スライド31

司会：眞壁さん、大変ありがとうございました。眞壁さんには、まず、アニメーション映像を通して、ICRCの活動について人道支援、尊厳の保護、予防、そして赤十字社との連携といったところについてご説明をいただきました。そして、終盤のほうでは、いかに関心を持つことが重要であるかという点についてご講義いただきました。お時間が限られていますので、ぜひ皆さんのほうから質問を受けたいのですけれども。挙手で近くのマイクのほうまでお越しいただければと思います。いかがでしょうか。

眞壁：単純な、簡単な質問でもなんでもよいので、気軽に手を挙げてください。

少し私のほうから質問してもよいですか。今日のこの話を聞いて、なんか少しICRCで働いてもよいかなと思った人は手を挙げてもらってもよいですか。１人もいませんか。やはり紛争というところが怖いでしょうか。

ジュネーブでも「これは日本人に特化している現象だ」と言われることがあります。現地でのコミュニケーションが自分たちの命を救うということもあり、英語できちんとコミュニケーションが取れることが必須です。英語のテストなども会話も含めて何回もありますし、そこで結構落とされてしまう方もいるのですが、やっと内定をもらって、では赴任地をどこにしようかなというときになって、「親が駄目だと言ったからやめます」というのが日本人には多いのだそうです。その人自身がやりたくても、やはり、自分の子どもたちにそんな危険な目に遭ってもらいたくないという親御さんの気持ちというのがあるのだろうと言っていたのですが、この話をある大学でしたときにそこにいた教授から「でも結局、自分が最終的には怖くなってしまって、親を言い訳に駄目と言われましたと言う学生もいると思うよ」といった見解なんかも出ました。

でも実際に、私なども南スーダンやフィリピンのミンダナオという武装勢力がいるようなところに行って思ったのは、ICRCはもう1世紀半以上紛争の最前線で活動をしているので、職員を守ってくれる体制がすごく整っているのです。中立な組織として反政府勢力と対話の関係を持っているので、闇討ちに遭うようなそういったこともないです。全く皆無かというとそうでもありませんが、やはり無茶はしませんし、組織が今まで築き上げてきた信頼性であったり、あとはこれまでの経験から来る情報の分析であったり、そういったもので守られています。本当に南スーダンに行ってもフィリピンに行っても、怖いと思ったことがないです。思う前に、上司のほうから連絡が来て「今こういう状況だから外へ出るな」など、事前にすぐ緊急態勢のようなものが敷かれます。

先ほど言ったような核兵器が使われたときも、やはり人道支援の人たちが被爆して生命を危機にさらされてしまうのは二次被害になり犠牲を広げる、ということで、現実的に考えた上で支援の限界を提示し、スタッフの安全を図っています。なので、頭で考えるとすごく怖いのですが、実際に現場に行くと、やはりこれまでの知識と経験が蓄積されていて、きちんと職員を守ってくれる組織だなというのは実感しました。

司会：眞壁さん、どうもありがとうございました。